

➤ 追悼会などは無用

由比忠之進は焼身自殺をする前夜、遺書を書いていました。「米国の沖縄小笠原占領とベトナム侵略に抗議して焼身自殺をする決心をした」という内容です。そして死後のことも次のように書き残しています。

簡条書きにしてその内容を要約するとこのようなものでした。

- 1) 自分は無神論者であり、死後の生命を全然信じないので葬儀は必要ないが、世間体があるからやっても良いがごく簡単にやること。
- 2) 香典などで集まった金は全部ベトナムの戦争犠牲者救済に使うこと。北及び南ベトナム両方に等分して。
- 3) 死後の霊を信じないから追悼会など全く無用。

そのような遺書でしたが、いろいろな場所で追悼集会が開かれました。それだけ由比の死を賭した行動は各界に衝撃を与え、また人々はその死を理解し痛みを分かち合いました。沖縄県祖国復帰協議会の会長、喜屋武真栄は「由比さんのやった気持ちは96万沖縄県民の全体的心情である」と語りました。

➤ 由比の死を各界の人々が悼む

社会評論家として、また毒舌家として有名で大きな影響力を持ち、当時でも「マスコミ界の帝王」とも言われた大宅壮一は、サンデー毎日で「首相訪米前日にこのような事件がおきたことは、日本はもとより、アメリカにとってもショックだろう。アメリカや日本にも、焼身自殺という抗議の形式が出てきたことは、人類全体の政治の中で、民主主義が行き詰まっていることを示している」と記し、「これは歴史的な重大な事件であって、一老人の“死の抗議”として軽く扱うべきものではない」と書き残しました。

由比と40年余に亘る友人の伊東三郎は、追悼集

会の案内文にこう書きました。

「私どもの友人、由比忠之進君は去る11月11日に首相官邸前において抗議の焼身自殺を、おこないました。このような行為にたいしては、いろいろなご意見もあろうかと存じますが、われわれは襟を正してこの厳しい事実をみつめたいと思います。つた

えられた抗議書、遺書にもありますように、由比君の行為は多くの国民の意思を代表し、憂国の至情にあふれ、やむにやまれぬものであったと思います。ここに由比君の霊を慰め、内外のうごきにたいして、私どもの気持ちを新たにするために、追悼集会を催すことになりました」

➤ エスペラントの仲間が追悼会

伊東の仲間であった熊木秀夫は、由比の長男である意出男を訪ねて追悼集会を説明しました。これに対して意出男は、「親は自分のやりたいことしたのだから満足しているでしょう。社会一般にたいする家族の迷惑も考えずに……。しかし、エスペランチストの方たちの心遣い、全国から寄せられた見知らぬ人たちの手紙や親父の遺書などを読んで、あらためて、一人の人間として見直しています。数日前も知らぬ方から香典が送られてきました。そのなかに千円が入っていました。百円はその人の子供が話を聞き、感激して送ってくれたものでした。いやがらせの手紙もいくつか来ましたが、好意を寄せてくれた手紙が圧倒的に多かった。追悼集会については、他からも申し入れが

ありましたが、エスペランチストの方でやるのでしたら異議を申しません。ただ、家族としてはそれを見守るだけです…」と語ったという。

➤ ベトナム人民を物心両面で支援

追悼集会は12月11日、東京三宅坂の社会文化会館ホールで行われました。由比が焼身自殺した現場からほど遠くない場所でした。会場の装飾は人形劇

第十五回 由比忠之進の残したものは……

ジャーナリスト、方正友好交流の会事務局長、著書『ある華僑の戦後日中関係史』

大類 善啓（おもしろいよしひろ）

団ブークが担当し、各団体からの献花は団体名は取り除きました。祭壇中央に由比の遺影、その右にはエスペラントの旗、緑星旗が立てられました。左にはエスペラントで「Per Esperanto Por Paco」(エスペラントで、世界平和のために!)と大書きされた文字が浮かび上がっていました。

この言葉は、1953年9月4日から3日間、オーストリアのザンクト・ベルテンで開催されたエスペランティストの会議で提唱されたものでした。

発起人を代表して三宅史平は、「由比さんの死は、わたくしたちがばくぜんと考えていた平和について、もっとはっきりと自覚させてくれました。(中略)由比さんの死はその瞬間から由比個人から離れて社会一般の問題となりました」と挨拶しました。

伊東三郎が続いて、「由比忠之進の人となり」を15分間にわたって紹介しました。誠実、温厚な人柄、エスペラントの精神を純粋に理解し、その運動に情熱を燃やしていたこと、ベトナム戦争に心を痛め、物心両面でベトナム人民を支援していたことを参列者に紹介し感銘を与えました。

➤「由比の思想は生きている」

また日本平和委員会の平野義太郎会長、宗教者平和会議の壬生照順、3月に東京で開催された「ベトナム人民と連帯しアリス・ハーズ夫人を記念する会」で初めて由比に出会った柴田進午(法政大学教授)らの追悼の言葉が続きました。

柴田は「由比忠之進さん!」と呼びかけた後、次のように遺影に語りかけました。「私はあなたが、佐藤首相のベトナム侵略への加担、沖縄政策に対して焼身抗議を決行されたこと。しかも、あなたが二年前デトロイトで焼身抗議を遂げたアメリカの老婦人アリス・ハーズ夫人に共感されていたことを知って、大きなショックを受けたものであります」。

その他に、朝日新聞記者でエスペラティストであり、『戦場の村』を書いた本多勝一(代読・岩垂弘)が追悼の言葉を述べました。この『戦場の村』をエスペラントに訳したのが由比だったのです。

最後に英文学者で評論家中野好夫が「由比さん

の死は、言葉で言い表せるものをはるかに超えたところに意味がある。あの馬鹿騒ぎの“国葬”に比べ(元総理大臣吉田茂の国葬のこと)、本日の会合はあまりにも参加者が少ない。しかし“国葬”は歴史のなかで笑われ、由比さんの残した一粒の麦はきっと見直される時が来る。由比さんは無神論者で魂が生き残ることは信じなかったが、その思想は生きている」と語りかけました。

南ベトナム平和委員会のテイッチ・テイエン・ハオ師、世界エスペラント協会会長のイヴォ・ラペーナからの弔辞が読まれました。そしてエスペランティストの学生や青年たち約60人たちが舞台上上がり、エスペラントの歌「ラ・エスペーロ」が歌われました。

➤焼身自殺という行為

柴田進午が初めて由比と会う奇縁となったアリス・ハーズという婦人は、アメリカのベトナム戦争に抗議して焼身自殺をしました。アリスはドイツからアメリカに移住したユダヤ系のクエーカー教徒です。それに続いてノーマン・モリソンら8人が焼身自殺で抗議しています。このノーマン・モリソンもクエーカー教徒でした。

クエーカーはキリスト教の一派ですが、その平和主義は徹底的で、その多くは良心的兵役拒否者でもありました。現在の天皇が皇太子時代の家庭教師であったエリザベス・バイニング夫人はクエーカー教徒でした。バイニング夫人の影響をより受けたのは皇太子より弟の常陸宮だったとか。そんな話を聞いて週刊誌記者だった私は取材で1970年代の初め、当時、港区・魚籃坂にあったクエーカー教徒の集会所を訪ね、その後も指導的な立場にあった人と親しくお付き合いすることもありました。

由比さんは自分を無神論者と言っていますが、クエーカー教徒と同じように平和への思いは強かったのでしょう。由比さんの死から今年ちょうど50年、由比さんの平和への思いを改めて胸に刻みたいと思います。